



十和田産品、わたしたちが作ってます

問十和田産品販売戦略室 ☎⑤6743



おいしい十和田ソムリエがインタビュー!

第12回

上明戸 園子 さん



左から、享一さん・幸子さん（父母）、園子さん、好一さん・玲音くん・歩実さん（息子夫婦と孫）

Profile

市内赤沼地区で、父母と息子夫婦とともに上明戸農園を営む。リンゴ75a、ブルーベリー30a、米7haを生産している。ブルーベリーやリンゴは摘み取り体験の受け入れを行っているほか、委託製造してジュースを販売している。

*ブルーベリーの生産を始めたきっかけは何ですか？

150年以上前から米を、80年以上前からリンゴを生産していました。ブルーベリーは平成16年に植え始めました。米とリンゴの作業がちょうど空いた夏の時期にできるので、都合のよい品目です。体験農園は3年前から始めました。整備は大変ですがお客さまと直接やりとりできる楽しさがあります。

*大変甘く糖度の高いリンゴと評判ですが、秘訣は何ですか？

できるだけ完熟してから収穫するように心掛けています。最近では※葉とらずリンゴにも挑戦しています。贈答用のリンゴは、何十年とお付き合いいただいているお客さまもあり、毎年「おいしい」と言っていたことが励みになっています。

※葉とらずリンゴ…収穫まで葉を取らずに育て、葉で作られるデンプンにより、糖分を多く含むリンゴ。

*家族3世代で作業されているのですね。

家族経営協定を結び、給料や休日を決めて作業しています。実際には、世代間で生産や販売に対する考え方の違いはあるのですが、父母や息子の間にわたしが入って調整したり、孫の存在が家族を和ませてくれるので、仲良くできています（笑）。

*今後はどのようにしていきたいですか？

1次産業（生産）だけではなく、2次産業（加工）や3次産業（販売）も自ら行う、いわゆる「6次産業化」を目指し、リンゴやブルーベリーの加工品を製造・販売していきたいです。また、米もブルーベリーもリンゴも、安定した（確実な）売り先を確保していきたいです。

おいしい十和田ソムリエブログ<http://ameblo.jp/oishii-towada--sommelier/>

とわだの文化財 4 ~十和田市の文化財を紹介するコーナーです

問生涯学習課 ☎②2313

とせんじょう 渡船場

むかし、奥入瀬川には橋がなく、人々は浅瀬を歩いて川越していた。

渡船場ができ、相坂～藤島および中掬～太田川原間で渡し舟を利用できるようになったのは、江戸時代になってからと言われている。



六戸川（奥入瀬川）寛政11（1799）年11月4日の川越図（瀧江長伯著『東遊奇勝』山崎栄作編より転載）※現在の御幸橋上流200m地点

『盛岡藩雑書』正徳三（一七一三）年六月四日に、相坂川（奥入瀬川）舟渡の書き付けがあり、この頃すでに渡船場があつて舟で川越していたものと思われる。

ここでの渡船の様子は、菅江真澄の天明八（一七八八）年の紀行文『委波氏迺夜魔』に「木の皮の綱をひきはへて、くり舟の渡り」と記され、また、高山彦九郎の寛政二（一七九〇）年の紀行文『北行日記』に「三四十間ノ川綱越舟渡し」と記されている。

一方、中掬の渡船場はいつ頃始められたのか年代は定かでないが、松浦武四郎の『鹿角日誌』嘉永二（一八四八）年七月十七日に「両方に大なる柱を立て二縄を張て手繰り渡し」とあり、どちらの渡船も、両岸に張った綱を船頭が手繰りながら舟を進める方法だった。

なお、明治三十年代になって赤沼と三日市間にも渡船場ができ、「綱を張り、小舟を備えて僅かに通行人の便を図りゐた」と『十和田湖町史』は伝えている。

渡船場は明治時代に入り、交通網の整備により順次架橋され、その役割を終えることになるが、その場所は地名や旧跡案内の標識によって今に伝えられている。

（文責…市文化財保護協会）